

入江内湖遺跡発掘調査報告書

—米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査—

1987

米原町教育委員会

序

米原町では数年来の懸案でありました、米原・入江両小学校の統合新設計画がようやく現実の運びとなり、その校地に入江干拓地が選定されました。

この入江干拓地は全域が入江内湖遺跡として知られており、干拓事業中に採集されました重要な遺物は現在琵琶湖干拓資料館に保管展示されております。

教育委員会では、学校建設に先だち、発掘調査を実施いたしましたところ、古墳時代の木製品が多量に出土いたしました。ここにその成果を報告書としてとりまとめることができました。本報告書が米原町の歴史をさぐる一助になれば幸いに存じます。

末文になりましたが、酷寒の中、調査に従事されました皆様をはじめ、御指導、御協力を賜りました関係者の方々に深く感謝の意を表します。

昭和62年3月

米原町教育委員会

教育長 福田定観

例 言

1. 本書は滋賀県坂田郡米原町入江地先（小字丸腹）に所在する入江内湖遺跡について、昭和59年度に実施した発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、米原町立米原小学校新設に伴うもので、米原町教育委員会が主体となって調査を実施した。
3. 本調査は発掘調査に関しては、昭和60年2月12日より3月31日まで実施し、遺物整理および報告書作成に関しては、昭和61年4月1日より昭和62年3月20日までおこなった。
4. 調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	米原町教育委員会	教育長	福田 定観
調査事務局	"	社会教育課 課長補佐	相宗 又兵衛
	"	主 事	山形 寛史
	"	主 事	鐺田 進
	"	主 事 補	池田 仁
調査担当者	"	技 師	中井 均

調査補助員 山田建、立川正明、浜崎悟司、大柳仁司、矢野勝朗、細川英雄

調査作業員 中関久松、堀川敏雄、中関みつえ、中関すえ子

5. 出土遺物の整理、復元、実測に関しては上記補助員がおこなった他、下記の諸氏に協力を願った。
中川和哉、千葉真由美、北川由美、池野正代、吉沢知恵子、田中慶希、井関敏、岩根達雄、宮川哲郎
6. 出土木製品の樹種鑑定には、(財)京都市埋蔵文化財研究所 岡田文男氏に依頼した。
7. 出土遺物の写真撮影については、寿福滋氏を頼した。
8. 本書の執筆および編集は中井均がおこなった。



横 楸



膝柄股楸

目 次

口 絵

序 文

例 言

第Ⅰ章 調査に至る経過 1

第Ⅱ章 位置と環境 1

第1節 位置 1

第2節 歴史的環境 1

第Ⅲ章 調査の結果 5

第1節 調査経過 5

第2節 層序と遺構 5

第3節 出土遺物 6

(1) 土器 6

(2) 木製品 8

第Ⅳ章 調査のまとめ 17

付 章 入江内湖遺跡出土木製品の樹種の調査結果について 18

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	2
第2図	調査地周辺図(明治26年測量2万分の1地形図)	3
第3図	干拓以前の入江内湖(昭和19年頃)	3
第4図	遺跡周辺地形およびトレンチ配置図	4~5
第5図	4~7トレンチ西壁土層柱状図	5
第6図	各トレンチ土層断面図	6~7
第7図	Kトレンチ遺物出土状態実測図	6~7
第8図	Gトレンチ遺物出土状態実測図	7
第9図	出土遺物(土器)実測図	9

表 目 次

表1	木製品樹種一覧表	15
付章		
第1表	木製品の樹種の同定結果	19

図 版 目 次

図版1	遺跡	(1)調査前遺跡遠景(東から)
		(2)試掘調査状況
図版2	遺跡	(1)Gトレンチ北半部(南から)
		(2)Kトレンチ全景(西から)
図版3	遺跡	(1)Kトレンチ東部(東から)
		(2)土器出土状況(Kトレンチ)
図版4	遺跡	(1)木製品出土状況(Kトレンチ)
		(2)木製品出土状況(Jトレンチ)
図版5	遺跡	(1)広縁出土状況(Kトレンチ)
		(2)膝柄股縁出土状況(Kトレンチ)
図版6	遺物(土師器)	(1)土師器 甕
		(2)ミニチュア土器
		(3)土師器甕・壺・高坏
図版7	遺物(木製品)	(1)広縁
		(2)同裏面
図版8	遺物(木製品)	膝柄股縁

- 図版9 遺物（木製品） (1)膝柄股線
(2)鐮状未成品
- 図版10 遺物（木製品） 鐮状未成品
- 図版11 遺物（木製品） 竪杵
- 図版12 遺物（木製品） (1)竪杵状未成品
(2)横樋
- 図版13 遺物（木製品） (1)たも
(2)たも
(3)たも
- 図版14 遺物（木製品） 丸木弓
- 図版15 遺物（木製品） 擗（オール）
- 図版16 遺物（木製品） 丸木舟
- 図版17 遺物（木製品） 容器（槽）
- 図版18 遺物（木製品） 容器（槽）
- 図版19 遺物（木製品） (1)容器（槽）
(2)容器（槽）
- 図版20 遺物（木製品） (1)容器（槽あるいは皿か）
(2)容器（槽あるいは皿か）
- 図版21 遺物（木製品） 紡織具（糸巻、腰あて、有頭棒）
- 図版22 遺物（木製品） 矢形木製品，木錘，撥形木製品
- 図版23 遺物（木製品） 俎状木製品
- 図版24 遺物（木製品） (1)俎状木製品
(2)折敷状木製品
- 図版25 遺物（木製品） 不明木製品（鋸状木製品，刀形木製品，部分材）
- 図版26 遺物（木製品） 不明木製品（部材）
- 図版27 遺物（木製品） 不明木製品（部材）
- 図版28 遺物（木製品） (1)不明木製品（部材）
(2)不明木製品（部材）
- 図版29 遺物（木製品） 不明木製品（部材）
- 図版30 遺物（木製品） (1)不明木製品（部材）
(2)不明木製品（部材）
- 図版31 遺物（木製品） 不明木製品（部材）
- 図版32 遺物（木製品） 不明木製品（部材）
- 図版33 遺物（木製品） 不明木製品（棒状木製品）
- 図版34 遺物（木製品） 不明木製品（棒状木製品）
- 図版35 遺物（樹種） 出土木製品顕微鏡写真（一）
- 図版36 遺物（樹種） 出土木製品顕微鏡写真（二）

第Ⅰ章 調査に至る経過

米原町西部には、大字米原に町立米原小学校と、大字朝妻筑摩に町立入江小学校が所在している。ところが両校ともに校舎が老朽化しており、加えて児童数が減少しつつあったので、この両校を統合する計画がもちあがった。この統合にあたって、両学区の児童の通学に極力支障をきたさぬよう、その中間点に校地を新たに求めることとなった。ところがその用地が、周知の遺跡入江内湖遺跡内にあたることから、町教育委員会管理課と社会教育課が協議をおこなった。その結果、当該地以外には用地が得られないとのことであり、埋蔵文化財に関する取り扱いについては、事前に調査を実施することとなった。

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 位置

今回の調査地点は、滋賀県坂田郡米原町入江字丸葎309番地に位置する。この地は旧入江内湖の北端にあたり、現地表面の標高は83.3～83.7mである。地目は大半が干拓田であり、調査地の北側が若干の畑地であった。ちょうど調査地の北側畑地の部分から土手が築かれているが、この土手が旧入江内湖の外周端であったわけであるが、汀線付近もしくは、水深の非常に浅い個所であったと考えられる。

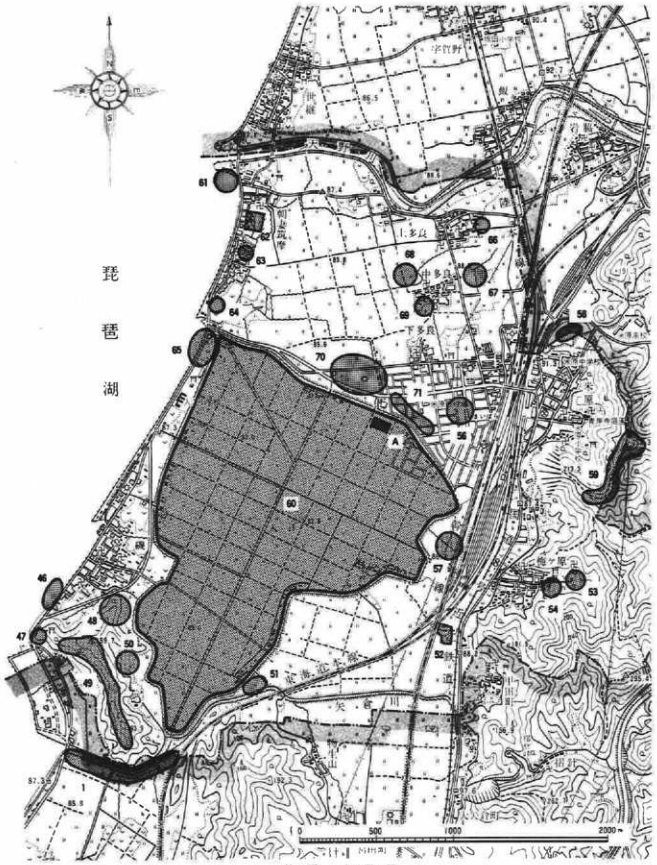
第2節 歴史的環境

入江内湖は東西2km、南北2.6km、周囲8kmにおよぶ、琵琶湖第2の大きさを誇る内湖であった。ところが昭和19年より昭和24年にかけて、干拓事業が実施された。この干拓事業の際、磯崎文五郎氏（現米原町文化財専門委員）の地道で熱心な遺物採集によって、入江内湖が遺跡であることが確認された。採集遺物は、縄文時代に関しては早期の尖底土器、石棒、凹石、磨石、骨角製銛などがある。弥生時代では鹿角戈3点、鹿角又鋸が注目される。古墳時代では勾玉、管玉、金環、石釧などの装飾具をはじめ、須恵器、古式土師器などの土器が多量に採集されている。また陶質土器も3点確認されている。奈良時代以降の遺物に関しては、和同開珎、神功開宝などの錢貨をはじめ、墨書土器、灰釉陶器が採集されている。このように入江内湖遺跡は、縄文時代早期より平安時代に至る一大複合遺跡であることが判明した。

しかしその後この入江内湖遺跡は近年に至るまで、考古学調査は実施されておらず、その規模、性格は不鮮明であった。昭和51年矢倉川河川改修に伴い、小字西野で調査が実施された。調査地は厳密には、入江内湖の外側になるが、ちょうど矢倉川が内湖にそそぐデルタ地帯であった。遺



琵琶湖



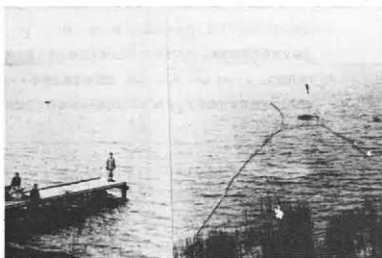
第1図 調査地周辺図

- | | | | | |
|-----------|-------------|-------------|----------|----------|
| A 今回調査地 | 1 矢倉川遺跡 | 46 磯湖岸遺跡 | 47 磯崎古墳群 | 48 磯山城遺跡 |
| 49 磯山城跡 | 50 堂谷遺跡 | 51 入江内湖西野遺跡 | 52 稲島城跡 | 53 雲水寺遺跡 |
| 54 善後寺遺跡 | 56 米原駅前遺跡 | 57 米原駅西遺跡 | 58 岩谷遺跡 | 59 太尾山城跡 |
| 60 入江内湖遺跡 | 61 朝妻港跡 | 62 朝妻城跡 | 63 法善寺遺跡 | 64 今江寺遺跡 |
| 65 筑摩湖岸遺跡 | 66 本願寺遺跡 | 67 中多良遺跡 | 68 立花遺跡 | 69 圓華寺遺跡 |
| 70 下定使遺跡 | 71 入江内湖周辺遺跡 | | | |

(遺跡番号は滋賀県教育委員会発行「昭和60年度滋賀県遺跡地図」と一致する)



第2図 調査地周辺図
(明治26年測量2万分の1地形図)



第3図 干拓以前の入江内湖(昭和19年頃)

構として、古墳時代中期の独立柱建物、ビット等が検出されている。遺物としては、弥生式土器をはじめ、古式土器器が多量に出土しており、湖北地方における土器器編年の基礎資料となった。また西野遺跡の調査によって、干拓後の内湖遺跡にも充分遺構の遺存している可能性が得られた^①

また内湖の南西端に位置する磯山の山麓では、縄文時代早期から晩期に至る多量の遺物が出土しており、県下でも最古の集落跡であったと考えられる。この磯山城遺跡における縄文時代早期の最下面は標高81m付近であり、旧内湖はもちろん、現琵琶湖の水面下に位置することになり、内湖形成に重要な示唆を投げかけた^②

入江内湖の西側では、筑摩湖岸遺跡の調査により、やはり標高83mという琵琶湖水面下1.5m付近で、古墳時代末から平安時代末に至る遺物が堆積していた。この筑摩湖岸遺跡は、宮内省大膳職（後に内膳職）筑摩御厨の推定地であり、緑釉、風字硯、墨書土器、斎串の出土がそれを裏付けている^③

これら近年の入江内湖周辺の調査地以外では、磯山西端に磯崎古墳群が立地している。後期の群集墳で、大正時代湖岸道路開設に際して、6基の古墳が発見された。石室はいずれも横穴式石室であったが、玄室は方形プランとなっており、渡米系氏族もしくは海人との関連が考えられる^④。また磯山東麓の堂谷では白鳳時代と考えられる鷗尾および布目瓦が出土しており、古代寺院もしくは窯が存在していたことは明らかである^⑤

入江内湖は南端で磯山および物生山によってさえぎられているが、その南方には、松原内湖（彦根市）が展開していた。この松原内湖北東岸に位置する松原内湖遺跡は縄文時代後晩期の良好な遺物出土しており、特に弦楽器と考えられる木製品や3隻の丸木舟、また弥生時代の小銅鐸などが特に注目される^⑥

このように入江内湖および松原内湖一帯は背後に山をひかえ、琵琶湖を眼前に望む、良好な立地条件を有し、縄文時代にすでに点在する集落があり、弥生時代以降は低湿地における農耕へのアプローチを容易にさせたといえよう。

注 ① 田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 1977

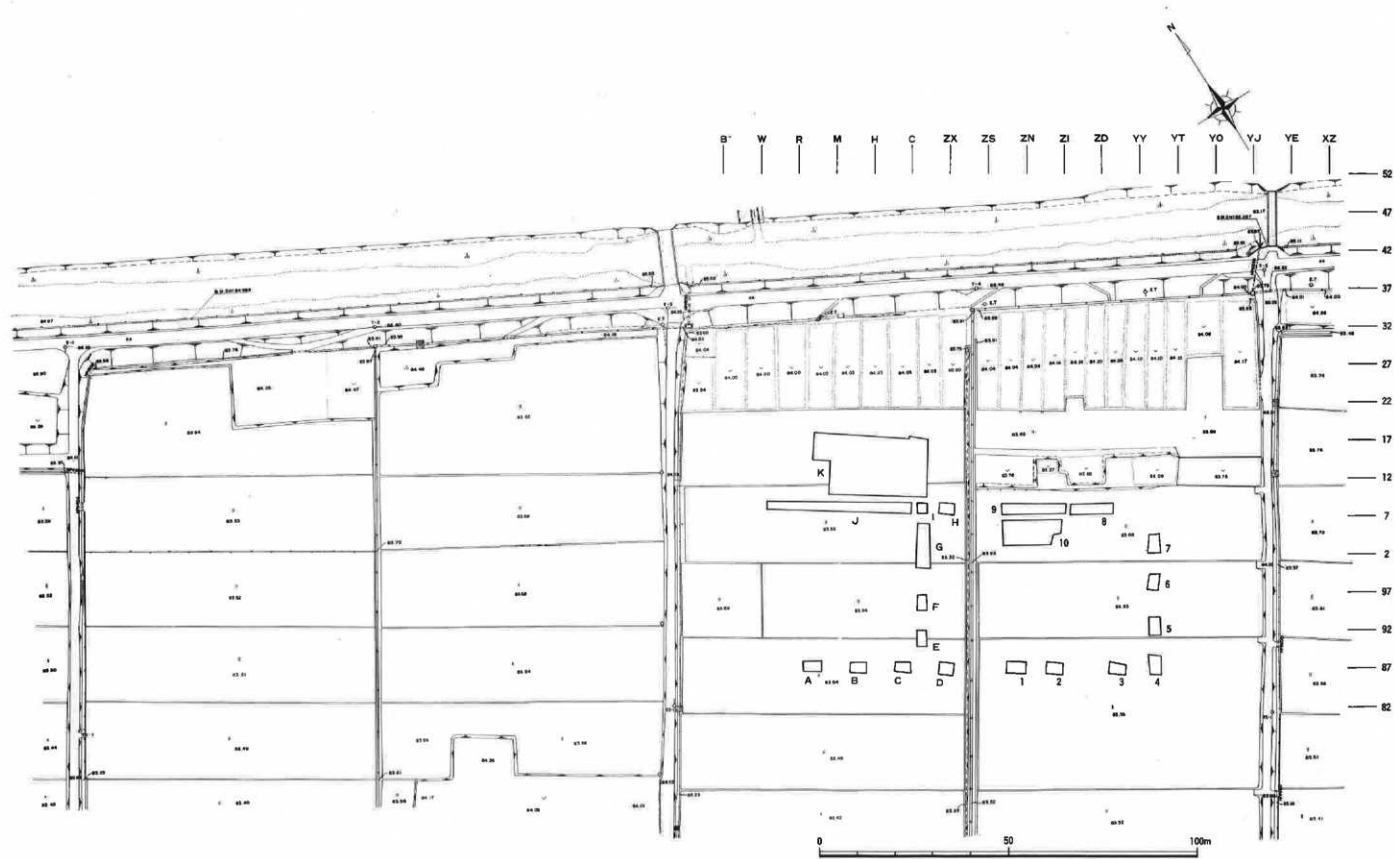
② 中井均他『磯山城遺跡—琵琶湖辺縄文早期～晩期遺跡の調査—』米原町教育委員会 1986

③ 中井均『筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』米原町教育委員会 1986

④ 滋賀県坂田郡教育会編『改訂坂田郡志』第一巻 1941

⑤ 磯崎文五郎氏採集資料。現在滋賀県立近江風土記の丘資料館に保管されている。

⑥ 『滋賀埋文ニュース』№68、№76、№80 滋賀県埋文文化財センター 1965、1986 岩崎信司「5.5cmの銅鐸形銅製品」（『滋賀文化財だより』）№108 財団法人滋賀県文化財保護協会 1986



第4図 通鈴周辺地形およびトレンチ配置図

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 調査経過

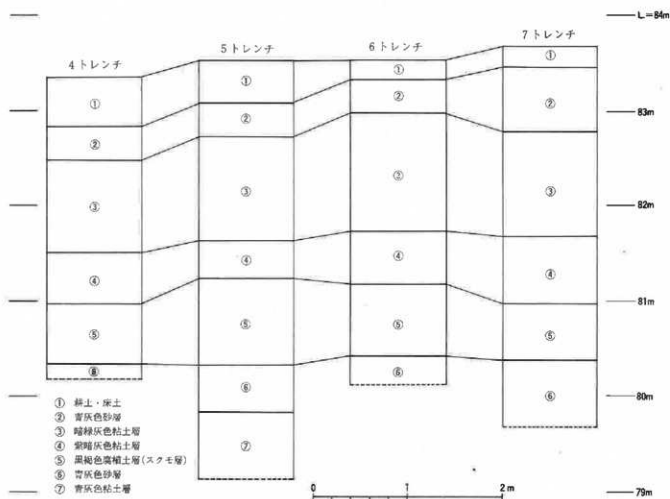
調査は校舎部分にそって、試掘トレンチを設定し、遺構・遺物包含層を確認したトレンチに関しては順次拡張していくことにした。

なお南北に走る水路より東側に関してはトレンチを便宜的に1トレ、2トレ……とし、西側に関してはAトレ、Bトレ……と呼称した。トレンチは試掘トレンチを含めて21ヶ所におよんだ。

調査はまずバックホウにより、遺物包含層まで掘削をおこない、以後手掘りによった。また遺物包含層の認められなかったトレンチに関しては旧内湖の堆積を調査するため、バックホウによって深掘りをおこない柱状図を作成した。

第2節 層序と遺構

今回の調査では残念ながら遺構は検出されなかったが、木製品を多量に包蔵する包含層を確認した。ここでは、旧入江内湖の中心部に向う7～4トレンチと、8～10トレンチおよび多量に木



第5図 4～7トレンチ西壁土層柱状図

製品の出土を見たG～Kトレンチについて、土層堆積を記述する。

・4～7トレンチ

この南北に設けた試掘トレンチでは遺物は出土していない。その基本層序は20～50cmの耕作土、40～70cmの厚さの青灰色砂層、100～120cmの厚さの暗緑灰色粘土層、40～70cmの厚さの紫暗灰色粘土層、60～90cmの厚さの黒褐色腐植土層が堆積する。この黒褐色腐植土層下は青灰色砂層、青灰色粘土層となる。黒褐色腐植土層はおおよそ標高81m付近では安定して水平堆積している。この中には多くの植物遺体が含まれていたが、人工的な加工を施したものは認められなかった。この黒褐色腐植土（スクモ層）は、この地がある時期低湿地であったことを示しており、その後内湖になったものと考えられる。

・8～10トレンチ

8～10トレンチは、約40cmの厚さの耕作土を除去すると、青灰色砂礫層となり、この砂礫層中に土器片が包含されていた。土器片はそのほとんどが細片で、しかもかなり磨滅しており、原位位置を保っているとは考えられず、流されてきたものと考えられる。青灰色砂礫層の下は、粘土と砂が互層となって堆積していた。これはこのトレンチ付近が何度か沼湿地と流路をくり返していたのではないかと考えられる。

・G～Kトレンチ

G～Kトレンチでは、多量の木製品と磨滅を受けない土器片が少量出土している。その層序は、10～40cmの厚さの耕作土の下にすぐ褐色腐植土層（スクモ層）が現われる。この腐植土層の標高は83.5m付近に水平堆積しており、明らかに4～7トレンチの標高81m付近に堆積している黒褐色腐植土層とは別のものである。G～Kトレンチの褐色腐植土層中には多量の木製品が包含されていた。この木製品は腐植土層の下にある粘質土および砂層の上面で安定しており、それより下層では遺物は皆無となる。

なおA～Fトレンチを深掘りした結果、腐植土層（スクモ層）を上下2層確認できた。上層は標高83m付近で、下層は80.8m付近となり、G～Kトレンチで木製品を包含していたものが上層に、4～7トレンチで確認した無遺物腐植土が下層にそれぞれ対応するものと考えられる。

第3節 出土遺物

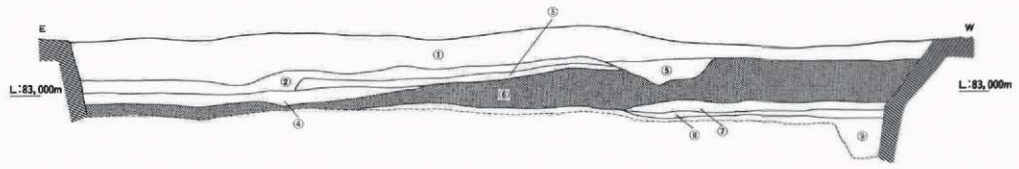
今回の調査で出土した遺物は土器と木製品であった。これらの遺物はすべて包含層からの出土であり、ここではトレンチ別にせず、一括して掲載した。

(1) 土器

土器の出土量は極めて少量で、しかも磨滅を受けているものも少なくない。土器はすべて土師質であり、須恵器はまったく含まれていない。器種は、甕・壺・高坏・ミニチュア土器がある。

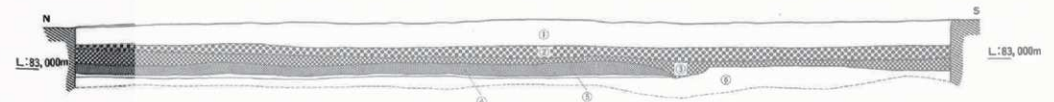
甕（第9図1～7）

(1)はほぼ完形をとどめるもので、球形の体部から大きく「く」の字状に口縁部がつく。口縁部は内面に肥厚して内傾する面をもつ。外面は肩部までハケ目をナデ消しており、肩部以下は横位のハケ目を施す。肩部には部分的に施文原体を押し引いたと思われる痕跡を残す。内面は、口縁部から肩部にかけて、ナデ仕上げを施し、肩部以下にはケズリを施している。これらの特徴よ



- ① 粘土・塚土
- ② 灰色砂層
- ③ 暗灰色粘土層
- ④ 黄灰色砂質粘土層
- ⑤ 茶褐色砂層
- ⑥ 黄灰色砂層(遺物包含層)
- ⑦ 灰色粘土層
- ⑧ 暗灰色砂層
- ⑨ 黄灰色粘土層

8トレンチ南壁土層断面図



- ① 粘土・塚土
- ② 暗茶褐色腐植土層(ススキ層)
- ③ 灰色砂層
- ④ 灰褐色粘土層
- ⑤ 青灰色砂層
- ⑥ 灰色粘土層

第Gトレンチ東壁土層断面図



- ① 粘土・塚土
- ② 暗茶褐色腐植土層(ススキ層)
- ③ 灰色砂層
- ④ 灰褐色粘土層
- ⑤ 青灰色砂層
- ⑥ 灰色粘土層
- ⑦ 黄褐色粘土層(ススキ層)
- ⑧ 灰褐色粘土層
- ⑨ 灰褐色粘土層

第I・Kトレンチ東壁土層断面図

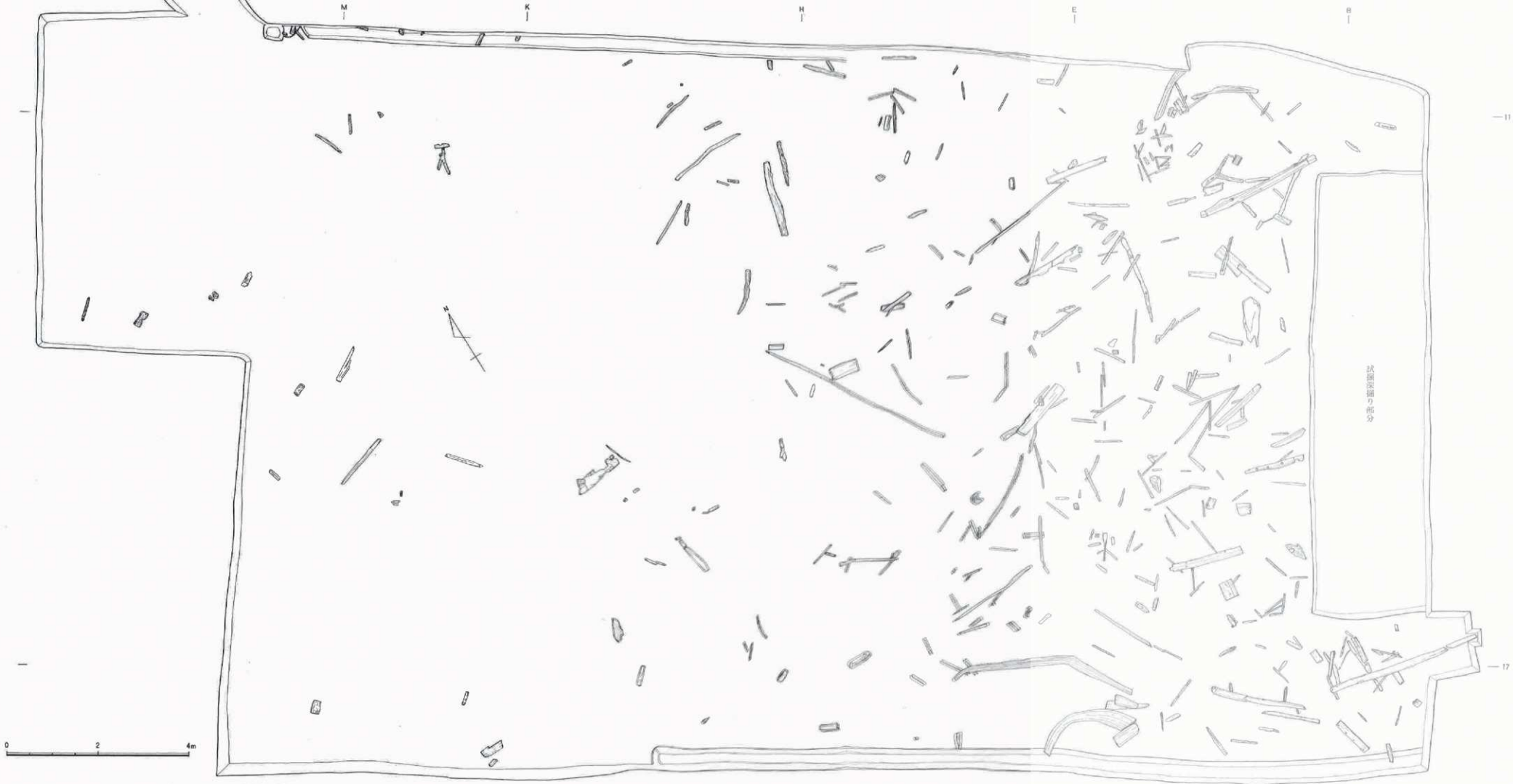


第Iトレンチ北壁土層断面図

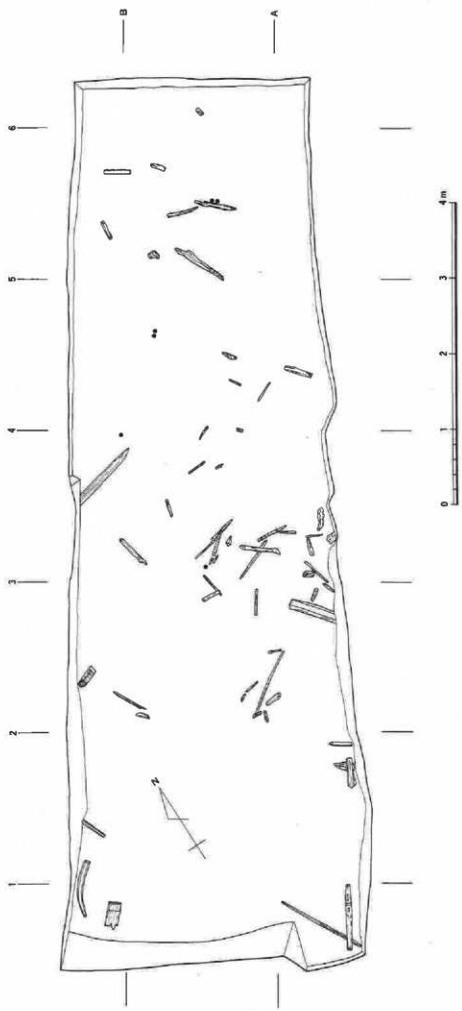
- ① 粘土・塚土
- ② 暗褐色粘土層(ススキ層)
- ③ 灰褐色粘土層
- ④ 灰褐色粘土層(有機質含)
- ⑤ 茶褐色腐植土層(ススキ層)
- ⑥ 灰褐色砂質土層
- ⑦ 暗灰色粘土層(有機質含)
- ⑧ 灰色砂層
- ⑨ 灰色粘土層



第6図 各トレンチ土層断面図



第7図 Kトレンチ遺物出土状態平面図



第8回 Gトレンチ遺物出土状態平面図
 (ドットは土層の出土位置を示す)

り、(1)は明らかに布留式新相の土器であろう。(6)も同様である。(2)~(4)は、やや口縁部が直行ぎみに立ちあがり、口縁端部は肥厚せず平坦面を有している。調整は(1)、(6)と同様である。(5)はやや屈曲のあまい受口状の口縁を有するもので、磨滅が激しい。(7)も同じく、やや屈曲の甘い受け口状口縁を有するものであるが、その施文は、口縁端部に刺突列点文を施し、肩部から体部にかけては、櫛状横線文と刺突列点文を交互に施す、典型的な受口状口縁である。

壺(第9図8)

(8)は広口壺と考えられ、やや内湾気味に開く「く」の字状の口縁をもつ。この口縁端部に刺突を施し、体部は粗いハケ目を施したのち、刺突をおこなっている。

高坏(第9図9~11)

(9)は坏部が深く、脚部にやや丸味をもつものである。(10)は脚端部が内湾気味に丸味をもっておさまるものである。(11)はグラス状の坏部に「ハ」の字状に開く短かい脚部をもつ高坏で、外面は端部から脚部の接合部分までを全面に粗い縦位のハケ目を施す。東海地方の影響であろう。

ミニチュア土器(第9図12)

(12)は直径約6cmのミニチュア土器で、内外面ともに手づくねで指頭圧痕を明瞭に残す。器壁は約1.5cmを測る厚手のものである。

(2) 木製品

本遺跡のG~Kトレンチ褐色腐植土層中および砂層上面からは各種の木製品が自然木とともに出土した。これらは同層中土器より古墳時代前期のものと考えられ、当時の生活、農耕を考えるとうえで良好な資料となろう。

出土木製品は、農耕具、狩猟具、運搬具、容器、紡織具、祭祀具、厨房具、その他(用途不明、建築部材など)に大別して整理した。

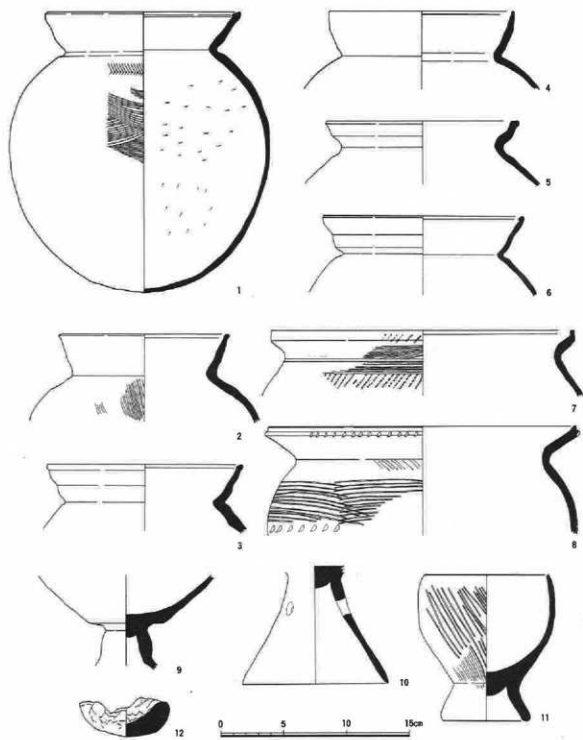
出土トレンチは異なるが、その層位はすべて同じであるため、ここでは一括してあつかうことにした。未成品がほとんどなく、損傷を受けて破損したものが多く、また、その破損品を再加工したものが大半であり、消費地(集落内)において役目を果たし終えたものの廃棄品であると考えられよう。以下個別に記述する。

一、農耕具

a 鍬・鋤類(1~5)

(1)は身丈よりも刃幅の方が広い鍬で、舟形突起は刃部に向けてやや幅狭になる長方形を呈している。柄孔と併列して側縁寄りに方形孔を穿っている。方形孔の側縁側は磨滅がいちぢるしく、また裏面側縁端部に幅0.5cm、高さ0.5cmの「かえり」状の突起をもつ。このため、断面は逆L字状を呈する。これはおそらく柄を支えるような支木をあて、方形孔より結んだのではなからうか。あるいは、富山県江上A遺跡で出土している鍬Aのように、あて板を固定し、方形孔には栓をさし込んだものかも知れない^①。これと同様のものは、大阪府池上遺跡より出土しており、えふりと報告されている^②。黒崎直は、これを横ぐわと分類しているが、くわと異なる用途を考えた方がいいかもしれないとしている^③。

(2)は、いわゆる二股鍬で、従来鋤と考えられていたものであるが、最近鍬柄を固定した股鍬が出土し、その機能が鍬であることが判明し、現在では鍬柄股鍬と呼ばれるようになった^④。着柄軸



第9图 出土遺物(土器)実測図

を笠形につくり、身部を二股にしている。着柄軸の先端は長さ7.5cmにわたり、断面を半月状の棒状に加工し、笠状に開く部分とは明確に区画される。身部は着柄軸の突出部から先端部まではほぼ同幅で伸びる。着柄軸の裏面には一段の段を有しており、柄の固定にずれのないようにしている。

(3)は身部が欠けているが(2)と同じく二股の着柄軸と考えられる。着柄軸を笠形につくる。軸は断面半月形の棒状となり、身部に近づくにしたがって幅広となり、伸びきったところが笠形に突出している。身部は笠形の突出部より外反して幅を広げており、身の中位より屈曲して直に先端に至るようである。

(4)は鋸の未成品と考えられるが、樹種が針葉樹で、農耕具としては疑問も大に残る。身は組合せすきDと呼ばれる^④、スコップ状すきと同じように舟底状に削り込んでいる。刃は作られておらず、使用痕もない。再利用したものらしく、身の縁部を切り込んでいる。着柄部には「蟻じゃくり」的な溝も認められる。

(5)も農具としては、疑問が残るが鋸の未成品としておきたい。ただし、樹種も針葉樹であり、不明木製品(梯子、部材など)としたほうがよいかもかもしれない。

b 堅杵 (6~12)

(6)~(4)は堅杵と考えられ、丸材の中央部を握り部として細くしている。(8)~(4)は、断面がほぼ円形となり、(6)はやや面を残し多角形となる。(7)は断面やや偏平であり、堅杵としては疑問が残る。(8)~(4)の両端木口面は球状となるが、(6)~(4)は平坦となる。ただし(4)の平坦はいちいちしい使用による磨減と考えられる。

(4)は長さ36cmにおよぶ大型のもので未成品と考えられる。握り部分には鋸の痕跡が目立つ。またこの握り部分はすべて焼けている。この形状から小型の堅杵と考えられる。しかしその打部は短かく、特殊な用法が想定されよう。あるいは大型の木錘であろうか。

c 横槌 (13~15)

(13)~(15)は円柱状の身と棒状の柄からなる横槌で、身の端部は3点とも平坦となる。(13)~(15)は身と柄を一木より作っているが、(15)は身の底部に孔があり、柄を差しこんだものとみられる。身の側面は一樣に敲打による窪みがつき、使用されたものとわかる。

二、狩猟具

a たも (16~18)

(16)は自然木の枝を利用したもので、端部は半円形に作り出している。ここに網をしばったと考えられる。(17)も同様に自然木の枝を利用したものであるが、端部は細くおさめるだけで、特別な加工は施していない。この2点はいずれも二股にわかれ、柄部をもつものであろう。ただし網仲には網をしばる孔は認められない。

(18)はやはり自然木の枝を利用しているが、反りの外側は新で削り平坦面とし、全体の断面は半円形となる。また端部近くは一面のみ丸味を残し、他の3面はすべて削り、平坦面としている。端部の加工は一面から削り込みをおこなっており、ここでしばったことはまちがいない。全体の反り具合から、別の用途も考えられる。つまり農耕具などの柄とも考えられるのである。しかし耕作に使うにはやや細く作られており、土おこしなどには耐えがたく、ここでは一応たもとしておきたい。このような端部を有するもので、滋賀県野洲町久野部遺跡から出土している木製品は、たもと報告されている^⑤。

b 丸木弓 (19)

鉤は枝を利用した丸木弓で、節部分の加工もほとんどおこなわず、樹皮を取り除いただけの簡単なつくりである。弓の形態は端部の両側辺を削り、突起状にしている。これは、大阪府池上遺跡報告書の弓筈形態分類のAに属するものである^⑧。

三、運搬具

a 櫓 (20~24)

⑳～㉔は櫓とみられるもので、特に㉑は柄から水かき部分まで残っている。柄の端部は「T」字状に握り部分をつくりだしている。柄の断面は円形となる。㉒～㉔は柄部を欠損しており、水かき部のみである。それぞれの最大幅は㉑が8cm、㉒が9cm、㉓が10cm、㉔が10cmを測る。

b 丸木舟 (25)

㉕は丸木舟の底部の部分と考えられるものである。舟底部はていねいに削られており、厚さは5cmを測る。巨木の外縁部を利用して作られているが、再利用されたらしく、端部には加工痕が認められる。

四、容器

a 槽 (26~31)

㉖は長さ50cmで、それぞれ幅3cmほどの平坦な外縁部を残して、くり抜いている。幅は半分欠損しているが、約32cmになる。この幅部の口縁部は平坦面を有さず、ほぼ丸くおさめている。深さは6cmを測る。外面底部と体部の稜線はほとんど認められず、丸味も持っている。全体になめらかに仕上げられている。

㉗は長さ54cmで、それぞれ端部は幅4cm、5cmの平坦な外縁部を残して、くり抜いている。幅は中央部分にふくらみをもって幅広となる。深さは7cmを測る。口縁部は中央部分が丸く仕上げられているが両端部に向かって少しずつ平坦面をもつように仕上げられている。全体に舟形状を呈する槽である。

㉘は長さ27.5cmで両端は幅3cmの平坦面の口縁部を有する。幅部分の口縁部は1cmの短かい平坦面をもつ。深さは2.5cmを測る。

㉙はほぼ㉗と同様の形状を呈しているが、全体に欠損しており、磨滅も激しい。

㉚は端部に幅3.5cmの平坦面を残し、くり抜いているが、他のものに比べ、そのくり抜きは非常に浅い。また、底部との稜線も明瞭でなく、底部の厚さも0.5cmと非常に薄い。

㉛は長辺の口縁部が5.5cmの平坦な外縁部を有している。内面は㉗と同様、底部との境界は明瞭ではなく、くり抜きの際の刃痕を残している。また底部の厚さは0.5cmと非常に薄い。

容器中でこの㉛㉜は他の槽とややその形状を異にしており、皿のような用途も考えられる。

五、紡織具

a 糸巻? (32)

㉜は用途不明に属するが、その形状は糸巻の枠木に類似している。両端を細く削り出し、この削り出しのはじまる部分に2箇所の方形の切り込みを入れている。糸巻の場合、この切り込み部分に、柄孔をあけている。

b 腰あて? (33)

㉝も本来用途不明の木製品と考えたほうがよいかもしれない。織機の際、腰にあてた「腰あて」

に類似する。断面半円形となり、底面のみは平坦面として加工している。両端部よりやや間隔を開けて、上面と側面に切り込み入れている。ただし、池上遺跡で出土している腰あては、織手が固定しやすいように、大きく湾曲しており、㊦とはやや形状が異なり、別の用途が充分考えられる。

c 有頭棒 (34~35)

㊦4~㊦8は端部に頭をつくり出したもので、㊦8は断面が半円形となり、㊦8は多面的な円形を呈する。おそらく紡織具の一種と考えられる。

d 木鍾 (37~39)

いわゆる「穂の子」と呼ばれるもので、材の中央部を細くして紐を結ぶもの㊦9㊦と、丸珠をミカン割りにして、断面三角形の材に懸垂用の孔をあけたもの㊦の2種類がある。

これらはいずれも蓆編みなどに用いられたものと考えられ、広義の編み物具として、紡織具中に分類した。特に㊦タイプは民俗例として、現在でも各地で用いられたものが残っており、雪囲のいす、フゴ、背中アテ、テゴ、俵などの蓆編みに使用されていた^⑥。

六、祭祀具

a 矢形木製品 (36)

㊦6は鎌部と矢柄を一本で作り出したもので、実用品ではなく、武器の機能を木材に表現し、罪穢や悪気を打ち払ったものであろう。鎌部は砲弾状となり断面は円形に近く、非常に丸味を持っている。矢柄部の断面もほぼ円形となる。県下では同様のものが、守山市服部遺跡で2例出土している^⑦。また福岡県嘉納遺跡からは、矢柄を竹で作り、サクラの皮でむすびつけられた鎌形木製品が出土している^⑧。なお歴史時代以降は形代として鎌形木製品の出土例は増加する^⑨。

七、厨房具

a 壺状木製品 (41~42)

㊦1は長さ50cm、幅23cmの長方形の木製品で浅い槽状の形状を呈している。底部には片方だけに溝が掘り込まれており、脚を差し込んだものと考えられる。なお長辺の一方（脚差し込み部のある方）は外縁部に平坦面をもち、かつ底部に向かって傾斜をもっている。これに対して、もう一方のほうは、底部のみでカットされており、脚もつかないようである。これは、㊦が完形でなく、本来もう少し長くて、脚部および外縁があったものが欠損したあと、再利用したとも考えられる。しかしいずれにせよこれが完形ならば斜の台であったろうし、再利用後も斜の台として使用していたことは確かであろう。なお底面には無数の刃物痕が認められ、厨房具としての用途があったことはまちがいないであろう。

㊦2は長さ28cm、短辺25cm、厚さ4cmの板材で、本来別の用途に用いられていたものを刳に再利用したものと考えられる。表面には無数の刃物痕が認められる。なお平安時代初期のものではあるが、兵庫県吉田南遺跡より類似の刳が出土している^⑩。

b 折敷 (43)

㊦3は長さ48cm、厚さ1cmを測る板材で、隅が丸くなる長方形曲物（折敷・折櫃）の底部ではないかと考えられるものである。方形孔が1ヶ所あり、補修孔か。また端部に方形の切り込みが1ヶ所認められる。あるいは部材であろうか。

八、その他（建築部材・用途不明）(40, 44~83)

㊦4は猴形の木製品で、上部に突起がある。たぶんこの突起を差し込んで、台脚として用いられ

たものを想定できる。

④は残長42cm、幅4.5cmを測り、断面は、長方形を呈する。その形状は刀状となり、刃部は鋸歯を刻んでいる。いわゆる鋸形木製品と呼ばれるものである。歴史時代以降の出土量は増加するが、その用途は明らかでない^⑤。

⑤は刀身を欠損した刀形木製品の柄と考えられる。ただし、通常の刀形ではなく刃部は尖がっておらず、鋸歯状の切り込みがあり、④同様、鋸形木製品の柄部としておきたい。

⑥は丸太材を厚さ12cmにぶつ切ったものを、台形に抉り取ったものである。

⑦は前出の鋸形木製品に類似した形状を呈するものである。ただし鋸歯の刻み方は、身部を切り込むのではなく、欖状の突起と刻み目を併用している。その間隔もやや間を開けて施されている。用途は不明である。

⑧は断片であるが、スマートな発形状をなしており、柄の1部分ではないかと考えられる。

⑨は板材の中央を幅広くのこし、両端を棒状に削りだして枝部をつくる。幅広部分には孔があげられている。その他に分類したが、その後、これは糸巻の横木に酷似していることがわかった。ただし類似の糸巻き具は歴史時代以降のものであり、古墳時代の何かがそれに一致するのか否かは不明である。

⑩は丸棒の端部近くに切欠きを入れて、円頭形にかたどっている。仕上げは粗い。用途不明。

⑪は現存長15.5cm、幅2.5cm、厚さ1.5cmの棒状の木製品で、表面は平坦となり、断面半円形となる。端部付近に長さ2.5cmにわたり抉り込みを入れており、ここに紐を巻きつけたと考えられる。

⑫は長さ86cm、幅7cm、厚さ5cmを測る柱状のもので、一段の段を有し、下部部は両面よりカットして尖がらせている。段の部分には長方形の納穴を、また上端より3分の1付近には正方形の納穴をもつ。建築部材か。

⑬は長さ54cm、幅6cm、厚さ2cmを測る柱材で、端部付近に正方形の納穴をあけている。建築部材か。

⑭は長さ63cm、幅14cm、厚さ3cmの板材で、端部の一方は半円形の掘り込みがあり、また中央部分に台形状の掘り込みも設けている。この台形掘り込みは貫通して孔とはならず、製作途中のものかもしれない。

⑮は長さ43cm、幅14cm、厚さ2cmの板材で長辺部に4ヶ所の正方形孔をもうける。もう一方の長辺部には隅部分にサクラの皮が巻きつけられた状態が残っていた。これは補修孔と思われる。この長辺部にはいま1つ円形の小さい補修孔も認められる。

⑯は長さ50cm、幅7cm、厚さ2cmの薄い板材で、端部付近に円形孔があく。

⑰は長さ57cm、幅14cm、厚さ1cmの板材で貫通しない長方形の掘り込みがある。

⑱は長さ78cm、幅11cm、厚さ3cmの板材で長辺の一方の中央部を半円形に切り込んでいる。用途は不明。

⑲は長さ36cm、直径4cmの断面円形の棒状木製品である。上端部は中心部のみ残り残して、長方形の突起状を形づくり、弓の頭の形状を呈する。おそらくは何かの柄材で、端部の突起を差し込んで使ったものであろう。

⑳は丸太材を外幹部のみ二股に残したもので、建築部材の一部と考えられる。類似のものとし

て、平城宮跡S D 6030（古墳時代）より出土したものがあり、柄孔の痕跡をとどめる丸木断片と報告されている⁹⁾。

柄は2cm×2cmの小さい方形の柱材で、直行して2cm×1cmの柱材が柄穴に差し込まれている。建造物内部の小さな部分材の一部であろうか。

柄は長さ79cm、幅29cm、厚さ1.5cmの大形で薄い板材である。長辺の一方は、隅部より、8cmのところまで両側より丸味をもって削り込まれている。その形状は現在のベットの頭部側板のようである。

柄は長さ40cm、幅31cm、厚さ3cmの板材で2ヶ所に併列して方形孔を有する。表面はなめらかに仕上げられているが、削り痕が波状に認められる。2ヶ所の方形孔はいずれもその周囲の磨減が激しく、長期にわたって、使用された結び痕であろう。用途は不明。

柄は長さ38cm、幅31cm、厚さ4cmの板材で長辺の両方に、それぞれ3ヶ所、都合6ヶ所にわたり、方形孔を設けている。両端のものは、側面近くにあけているが、中央のものはやや内側にあけており、孔自体もやや小さい。その間隔は孔の中心で測ると、ちょうど2:1の寸法となる。また板材の中心よりはややずれるが、内側部分にも1ヶ所の方形孔がある。用途は不明。なお表面には多数の刃物痕が認められる。

柄は長さ25cm、幅13cm、厚さ1cmの板材で、長辺の一方を大きく半円形に抉り込んでいる。比較的出土例は多く見られるが、用途については不明である。

柄は、幅11cmの柱材で、端部は凸状の高まりを有している。この部分は長さ12cm、幅8cmを測り、さらに深さ2.5cmの掘り込みをおこなっており、この部分の断面は凹状となる。用途は不明。

柄は現存長25cm、幅6.5cm、厚さ1.5cmを測る板材で、長辺部の一辺に円形の小さな孔を2ヶ所あけている。部材か。

柄は現存長36cm、幅6cm、厚さ1cmを測る板材で、ほぼ中央に方形の柄穴をあけ、長辺の一辺にも方形の柄穴があいていたと考えられるが、欠損しており、現在は切り込みのようになっている。用途不明。部材か。

柄は現存長38cm、幅6cm、厚さ2cmを測る板材で、柄とほぼ同位置に柄穴があいていたと考えられるが、やはり欠損しており、掘り込み状を呈している。用途は不明。部材か。

柄は現存長37cm、幅13cm、厚さ2cmの板材で、長辺の一辺の端に方形孔をあけている。用途不明。部材か。

柄は板材の一部と推され、長辺部には方形の抉り込みがあげられている。本来これは柄穴であったのであろう。類似のものとしては鼠返がある。

柄も板材の一部と推され、長方形に対して垂直に2本の溝が掘り込まれている。この溝は幅6cm、深さ1cmとほぼ同規模で、溝間は端間で11cmある。

柄も板材の一部で、長辺部両辺に対角線上に長方形の柄穴が2ヶ所あけられている。この柄穴から長辺の一辺方向に向かって、紐（サクラの皮か）を結びつけた凹部があり、ずれを防いでいる。これは建築部材ではなく、小さな組立物の部材であろう。

柄は棒状の木製品である。柄は柄は両端部が残存しており、柄は両端部を丸くおさめている。柄は端部を有頭状に加工しており、また幅3cmの抉り込みをもうけている。柄は多方向より、鋭利な刃物を刻みつけた痕跡が明瞭に残っている。

図版番号	木器番号	器種	樹種名	備考	図版番号	木器番号	器種	樹種名	備考						
7	1	広	楸	アカガシ亜属	24	43	折敷状木製品	ス	ギ						
8	2	膝柄	楸	*	25	44	不明木製品(扇状木製品)	ヒ	ノ	キ					
9	3	膝柄	楸	*	45	45	不明木製品(刀形木製品)	ス	ギ						
	4	扇状	未成	品	ス	ギ	46	不明木製品(部材)	ヒ	ノ	キ				
10	5	扇状	未成	品	*	47	不明木製品(扇状木製品)	ス	ギ						
11	6	整	枠	枠	ツ	バ	キ	48	不明木製品(柄材)	*					
	7	整	枠	モ	ミ	49	不明木製品(糸巻具)	ヒ	ノ	キ					
	8	整	枠	サ	カ	キ	50	不明木製品(部材)	サ	カ	キ				
	9	整	枠	*	51	不明木製品(部材)	ス	ギ	図版36-30, 31, 32						
	10	整	枠	*	26	52	不明木製品(部材)	ヒ	ノ	キ					
	11	整	枠	ツ	バ	キ	53	不明木製品(部材)	ス	ギ					
	12	整	枠状	未成	品	ハン	ノ	キ	54	不明木製品(部材)	*				
	13	横	楯	イヌ	ガ	ヤ	55	不明木製品(部材)	ヒ	ノ	キ				
	14	横	楯	*	27	56	不明木製品(部材)	*	57	不明木製品(部材)	ス	ギ			
	15	横	楯	アカガシ亜属	58	不明木製品(部材)	ヒ	ノ	キ						
13	16	た	も	カ	ヤ	59	不明木製品(部材)	ス	ギ						
	17	た	も	*	60	不明木製品(部材)	?	(針葉樹)	61	不明木製品(部材)	ス	ギ			
	18	た	も	*	28	62	不明木製品(部材)	ヒ	ノ	キ					
14	19	丸	木	円	イヌ	ガ	ヤ	63	不明木製品(部材)	*					
	20	楯	(オール)	アカガシ亜属	29	64	不明木製品(部材)	ス	ギ						
	21	楯	(オール)	ス	ギ	30	不明木製品(部材)	*	66	不明木製品(部材)	*				
	22	楯	(オール)	*	31	67	不明木製品(部材)	モ	ミ						
	23	楯	(オール)	*	68	不明木製品(部材)	ス	ギ							
	24	楯	(オール)	アカガシ亜属	69	不明木製品(部材)	ヒ	ノ	キ						
16	25	丸	木	舟	ヒ	ノ	キ	70	不明木製品(部材)	*					
17	26	容	器(槽)	ス	ギ	32	不明木製品(部材)	*	71	不明木製品(部材)	ス	ギ			
18	27	容	器(槽)	ヒ	ノ	キ	72	不明木製品(部材)	ス	ギ					
19	28	容	器(槽)	ス	ギ	73	不明木製品(部材)	*	33	74	不明木製品(棒状木製品)	ヒ	ノ	キ	
	29	容	器(槽)	*	75	不明木製品(棒状木製品)	ス	ギ							
20	30	容	器(槽あるいは皿か)	ス	ギ	76	不明木製品(棒状木製品)	ヒ	ノ	キ					
	31	容	器(槽あるいは皿か)	ヒ	ノ	キ	77	不明木製品(棒状木製品)	ス	ギ					
21	32	紡	織	具(糸巻)	ヒ	ノ	キ	78	不明木製品(棒状木製品)	ヒ	ノ	キ			
	33	紡	織	具(腰あて)	?	(針葉樹)	34	79	不明木製品(棒状木製品)	モ	ミ				
	34	紡	織	具(首頭棒)	カ	ツ	ラ	80	不明木製品(棒状木製品)	ス	ギ				
	35	紡	織	具(首頭棒)	ス	ギ	81	不明木製品(棒状木製品)	*	82	不明木製品(棒状木製品)	ク	リ		
22	36	矢	形	木	製	品	*	83	不明木製品(棒状木製品)	ス	ギ				
	37	木	鎌	サ	カ	キ	23	41	組	状	木	製	品	*	
	38	木	鎌	ヒ	ノ	キ	24	42	組	状	木	製	品	ス	ギ
	39	木	鎌	サ	カ	キ									
	40	盥	形	木	製	品	ヒ	ノ	キ						

表1 木製品樹種一覧表

- 注 ① 久々忠義「木製品 D江上A遺跡」(『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編—』上市町教育委員会 1984)
- ② 小野久隆, 奥野都『池上遺跡 第4分冊の1 木器編』(財)大阪文化財センター 1978
- ③ 黒崎直「6農具 くわとすき」(『弥生文化の研究』5 道具と技術) 1985)
- ④ 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告X 古墳時代I』1980
- ⑤ 前掲③
- ⑥ 谷口徹「木製品」(『久野部遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 1977)
- ⑦ 小野久隆, 奥野都『池上遺跡 第4分冊の2 木器編』(財)大阪文化財センター 1978)
- ⑧ 渡辺誠「付編 勝山市東部における“もじり編み”用錘具の民俗調査」(『福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書』勝山市教育委員会 1978)
- ⑨ 谷口徹他『服部遺跡発掘調査報告書V』滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 1984
- ⑩ 栗原和彦他『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集 福岡市西区大字拾六町所在墓納遺跡の調査』福岡県教育委員会 1976
- ⑪ 奈良国立文化財研究所編『木器集成図録近畿古代篇』1985
- ⑫ 前掲③
- ⑬ 前掲④
- ⑭ 前掲④

第IV章 調査のまとめ

今回の調査では遺構を認めることはできなかった。しかし調査地区の北西部に木製品を多量に包蔵する包含層から出土する土器はおおよそ古墳時代前期にあてはめられよう。これら出土土器中には須恵器をはじめ、それ以降の土器は含まれておらず、出土木製品もかなり時期を限定でき得る資料と考えられる。

遺跡自体に目を向けてみると、干拓事業で発見された入江内湖遺跡は、近年その周辺で数ヶ所にわたり、発掘調査が実施され、それぞれ多大の成果をおさめたわけであるが、旧内湖自体が調査されたのは今回が初めてであった。調査当初、干拓事業によって遺構面、包含量が攪乱されているのではないかと思われたが、耕土下は攪乱されることなく、包含層の堆積が認められた。これによって旧内湖は干拓されたものの、まだ充分遺構、遺物包含層の遺存していることが明らかとなった。特に内湖岸では耕土・床土を除去すると、その直下に包含層が遺存しており、今後の周辺調査に大きな期待がもたれる。

遺物の出土したスクモ層は標高83.0～83.5mに付近にはほぼ水平に堆積していた。これは現琵琶湖水面の84.371mより0.9～1.4m下となる。最近の周辺調査例でも遺物を包含するスクモ層が検出されており、それらを列記してみると、筑摩湖岸遺跡で83.0m、磯山城遺跡で82.8～83.5m、入江内湖周辺遺跡で83.2mあった。これらは内湖の端部ばかりであるが、内湖全域に広がる可能性を示しているといえよう。また入江内湖西野遺跡では掘立柱の遺構が検出されているが、この遺構面の標高は84.3～84.6mであった。つまり、集落は内湖岸のやや微高地に立地していたと考えられ、今回の包含層などは集落から破棄されたものと考えられよう。内湖全域に広がるスクモ層を考えるならば、今回の遺物を使用していた集落は、やや北方の内湖外に求められよう。

次に遺物に目を向けると、内湖遺跡という特性上、湧水は激しいが、木製品の保存状態は極めて良好であり、出土量も豊富であった。器種は農耕具、狩猟具、容器、紡織具が中心であり、当時の一般集落における木製品の姿を如実に示してくれている。これらは低湿地における農耕とともに、丸木舟、櫂、たもなどは琵琶湖の漁撈への積極性をも物語ってくれている。入江内湖西野遺跡では農耕具が出土しておらず、生産基盤が内湖に求められるとしているが、今回の調査地及び昭和60～61年度に調査を実施した入江内湖周辺遺跡では前述のように、農耕に依存しつつ、内湖への積極的なアプローチが認められるものである。

本報告書では用途不明の木製品もできるだけ収録したが、これらが今後の解明に参考になれば幸いである。

付 章 入江内湖遺跡出土木製品の樹種の調査結果について

東京都埋蔵文化財研究所 岡田文男

調査法

米原町教育委員会から調査依頼を受けた木製品はすべて水漬り状態であるので、安全カミソリで木口面、板目面、柀目面の簡易プレパラートを作成し、顕微鏡下で樹種の同定を試みた。

木製品の多くは遺存状態が良好であったが板材の一部（すべて針葉樹材）に表面が乾燥しきったものがあり、それらは分野壁孔が破壊されており十分な同定が出来なかった。

セクションの採取は最小限に留めるように努めたが、同定の精度を上げるために繰り返しセクションを採取し、木製品の表面をやや損傷したものもある。

同定結果

調査の結果、樹種の判明したのは9科11種、不明2点である。以下に簡単に同定理由と問題点を述べる。

カヤ（図版35 1～3）

柀、たもとされたものが該当する。カヤは年輪界がそれほど明瞭でなく、均質も密である。本資料は枝を利用したもので、顕微鏡下ではらせん肥厚が明瞭に2重になっているの見える。資料の放射組織の細胞高は低く、その点でイヌガヤと板目面では良く似ているが、繰り返しセクションをとって観察しても樹脂細胞を認めることができず、カヤと判断した。

イヌガヤ（図版35 4～6）

弓および横髄が該当する。イヌガヤの年輪界はそれほど明瞭でない。顕微鏡下ではらせん肥厚が明瞭で、放射組織の細胞高が低い点でカヤとよく似ている。しかし、本資料を前述のカヤと比較すると、板目面において樹脂細胞ストランドを観察できることでカヤとは区別することができる。

モミ（図版35 7～9）

構成要素は仮道管および放射柔細胞からなる。年輪界は明瞭で、年輪幅も大変広いのが普通である。柀目面では放射柔細胞にじゅうず状末端壁をみることができる。資料7は材が大変硬くモミとするのにやや疑問が残る。

スギ（図版35 10～12）

構成要素は仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる。分野壁孔はスギ型で調査した全資料で壁孔を確認できた。

ヒノキ（図版35 13～15）

構成要素は仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる。分野壁孔はヒノキ型であるが、調査した資料のなかには既に自然乾燥が進み、分野壁孔が全く観察できないものもあり、それらについては樹脂細胞の末端部分がじゅうず状であるかどうか、また年輪界がヒノキ型であるかどうかで判断した。

不明針葉樹

資料33, 60はイヌマキに似るがなお検討の余地があるので不明にする。

	樹種(科名)	名	木製品番号
1	カヤ(イチイ科)	<i>Torreya nucifera</i> Sieb.et Zucc.	16,17,18
2	イヌガヤ(イヌガヤ科)	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K.Koch f. <i>drupacea</i> Kitamura.	13,14,19
3	モミ(マツ科)	<i>Abies firma</i> Sieb.et Zucc.	(7),67,79
4	スギ(スギ科)	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don.	4,5,21,22,23,26,28,29,30,35,36, 42,43,45,47,48,51,53,54,57,59, 61,64,65,66,68,72,73,75,77,80, 81,83
5	ヒノキ(ヒノキ科)	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	25,27,31,32,38,40,41,44,46,49, 52,55,56,58,62,63,69,70,71,74, 76,78
6	ハンノキ(カバノキ科)	<i>Alnus japonica</i> Steudel.	12
7	クリ(ブナ科)	<i>Castanea crenata</i> Sieb.et Zucc.	82
8	アカガシ亜属(ブナ科)	<i>Quercus</i> sp.	1,2,3,15,20,24
9	カツラ(カツラ科)	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	34
10	ツバキ(ツバキ科)	<i>Camellia japonica</i> L.	6,11
11	サカキ(ツバキ科)	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.pro parte emend.Sieb.et Zucc.	(8),(9),00,39,50

第1表 木製品の樹種の同定結果 ()は同定結果に検討余地のあるもの

ハンノキ (図版35・36 16~18)

散孔材で集合放射組織を持ち、集合放射組織は年輪界で樹心方向にへこむ特徴を持つ。板目で見ると集合放射組織はハンノキの特徴が良く出ている。

クリ (図版36 19~21)

環孔材で大道管を持つ。放射組織はすべて単列である。

カシ (図版36 22・23)

放射孔材である。放射組織には単列のものと広放射組織の2種類がある。資料3はアカガシに酷似する。

カツラ (図版36 24~26)

散孔材で道管は年輪全体を通じて平均に分布する。径目面では多数のバーを持つ階段穿孔を観察できる。放射組織は異性で1-2列である。板目面では道管中に多数のチロースを認めることができる。本資料は枝材であり、やや道管の分布が少なく、その点で同定に検討の余地がある。

ツバキ (図版36 27~29)

散孔材で道管の径は小さい。放射組織の直立細胞のなかにシュウサン石灰の結晶を含むものがあり、そういう細胞はダルマ状に脹れている。

サカキ (図版36 30~32)

散孔材で小さな道管が年輪全体に分布する。放射組織は異性で単列のものが多く、部分的に2列になっている。板目面では繊維状仮道管の壁に大型の有縁壁孔が一列に並ぶのが見える。資料のなかでサカキの特徴が良く出ているのは50で、それ以外のものは板目面の放射組織の配列に検討の余地がある。

参考文献 島地謙、伊東隆夫『図説 木材組織』地球社 1982

圖 版



(1) 調査前遺跡遠景(東から)



(2) 試掘調査状況



(1) Gトレンチ北半部 (南から)



(2) Kトレンチ全景 (西から)



(1) Kトレンチ東部(東から)



(2) 土器出土状況(Kトレンチ)



(1) 木製品出土状況 (Kトレンチ)



(2) 木製品出土状況 (Jトレンチ)



(1) 広嶽山上状況 (Kトレンサ)



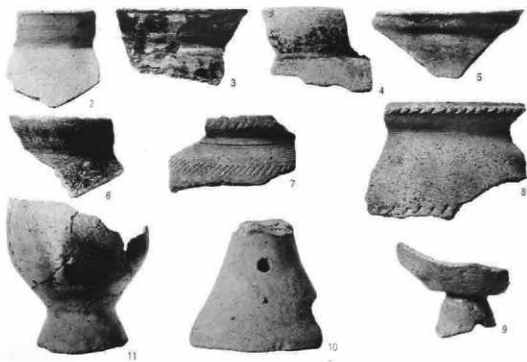
(2) 黒柄殿兼出土状況 (Kトレンサ)



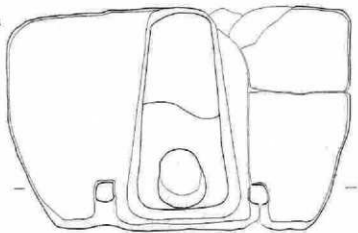
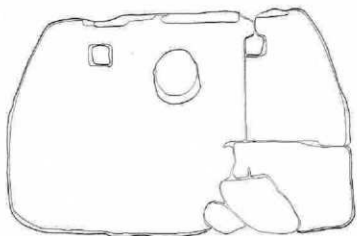
(1) 土師器 甕



(2) ミナチユア土器



(3) 土師器 甕・甞・高坪





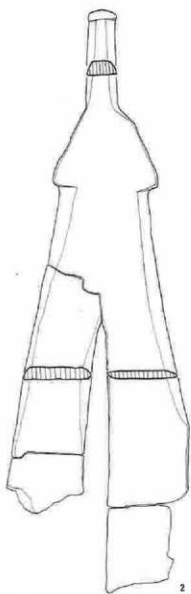
1) 表側

1

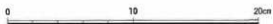


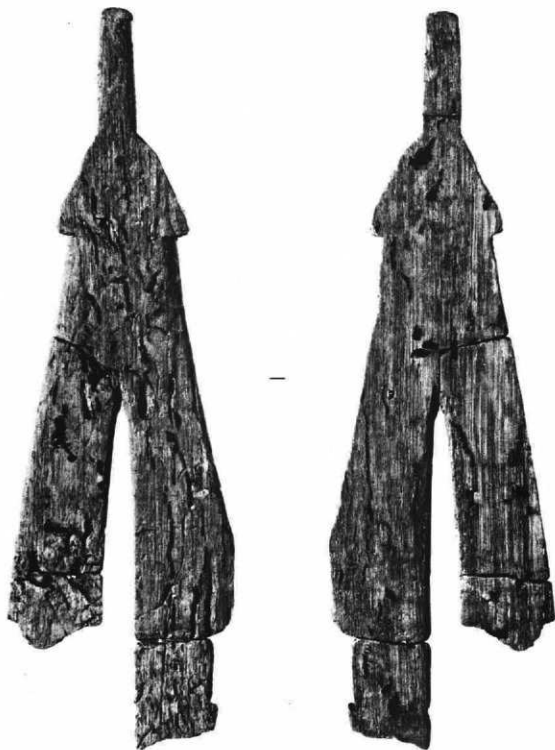
2) 裏面

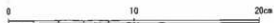
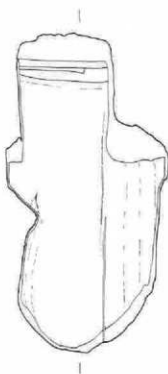
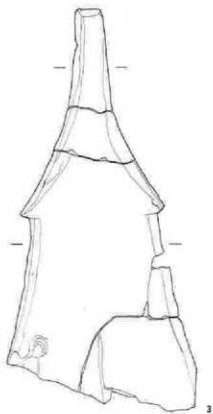
1

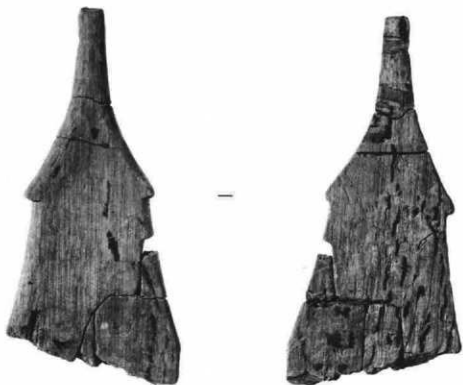


2



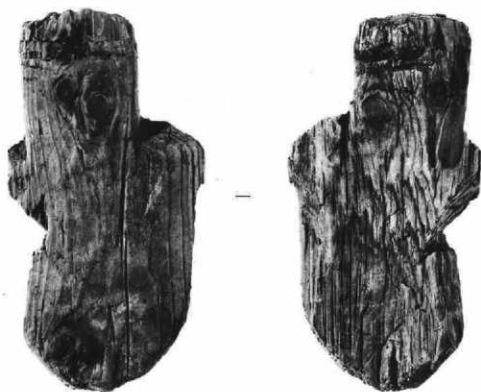






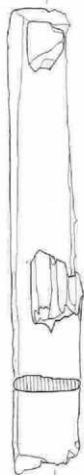
(1) 櫛柄段米

3

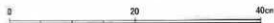


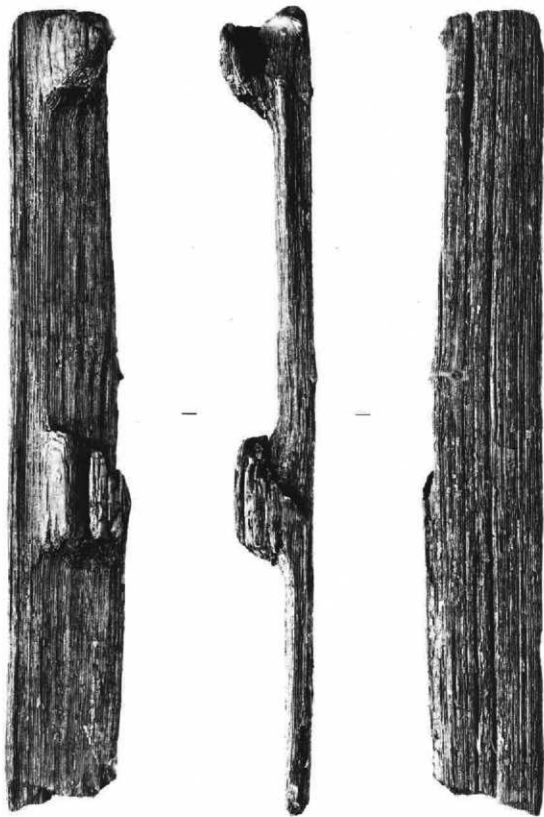
(2) 櫛状未成品

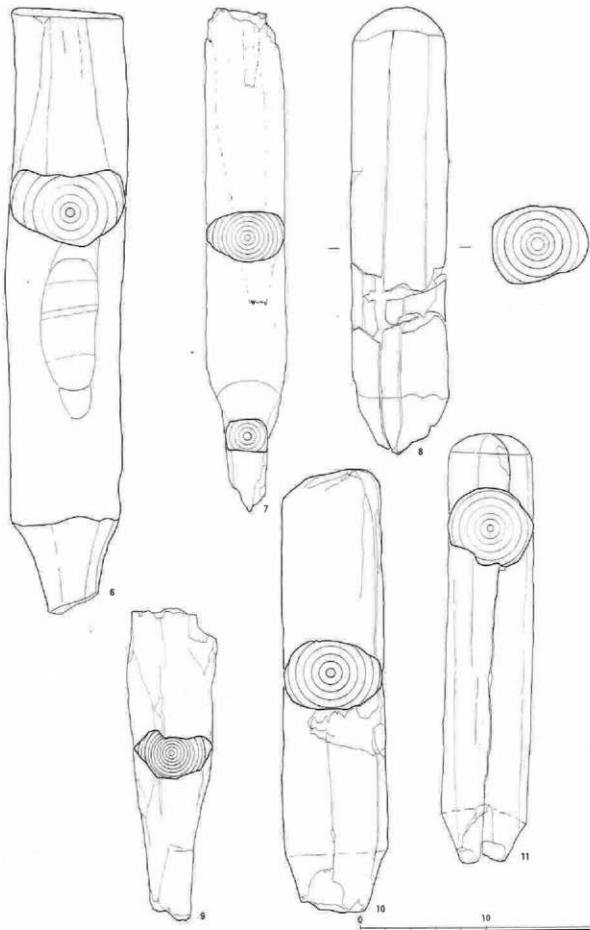
4



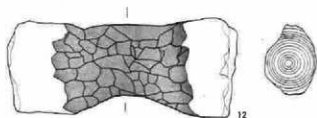
5



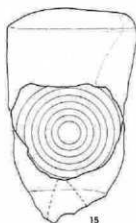
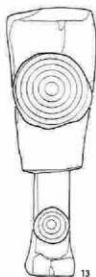




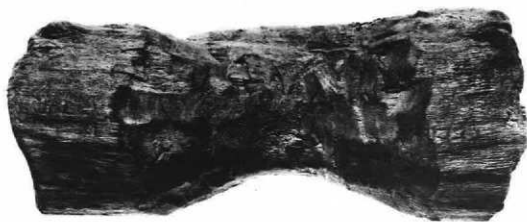




0 20 40cm (12)



0 10 20cm (13~15)

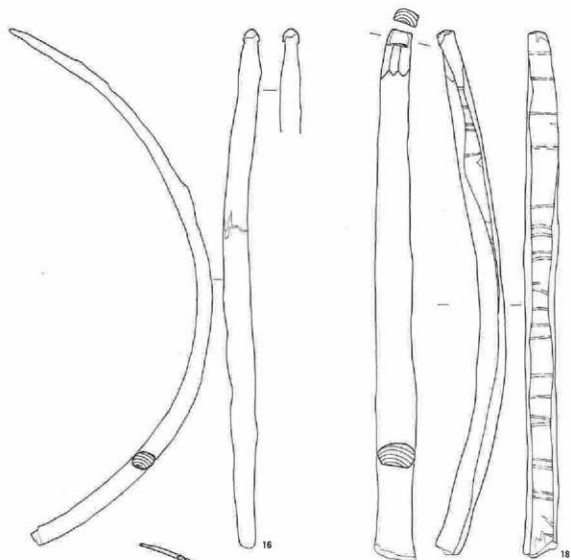


(1) 整棒状未成品

12



(2) 横槌





(1) たも



16



16

拡大部分



17

(2) たも



(3) たも



18



18 拡大部分



18 拡大部分



20



21



22

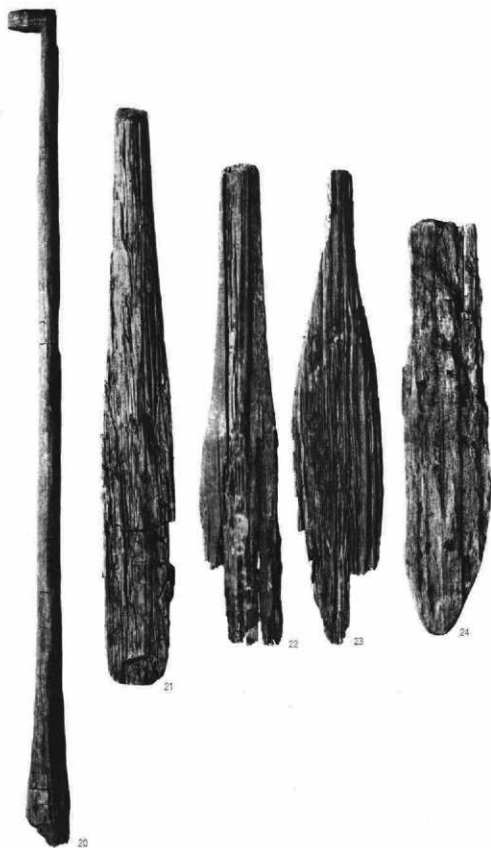


23

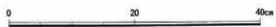
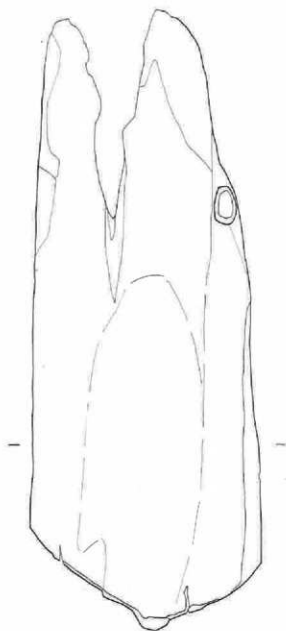


24



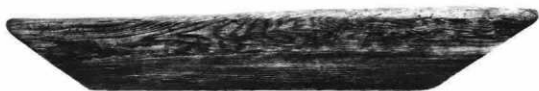
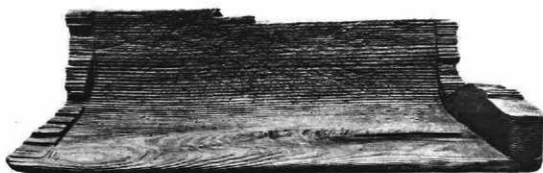


棍（子一丸）

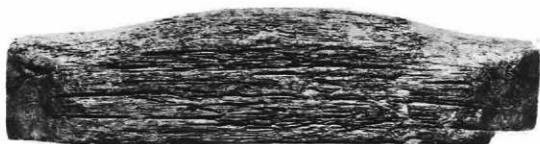
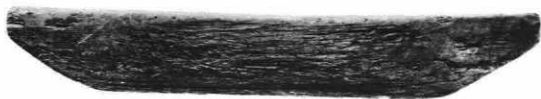
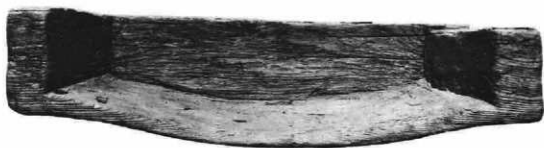


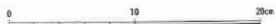
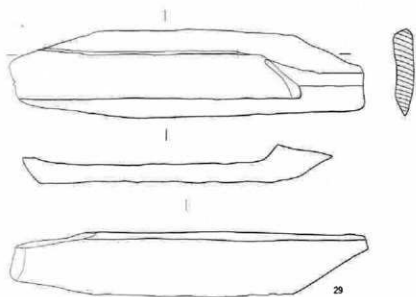
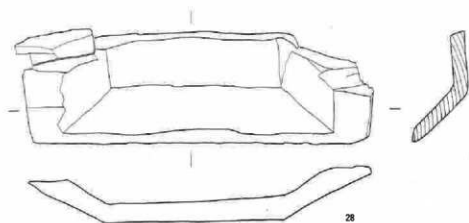








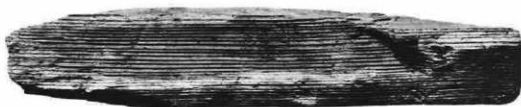






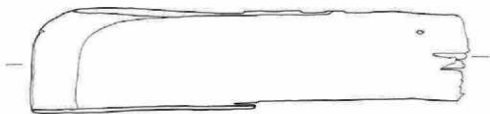
(1) 容器(樽)

28

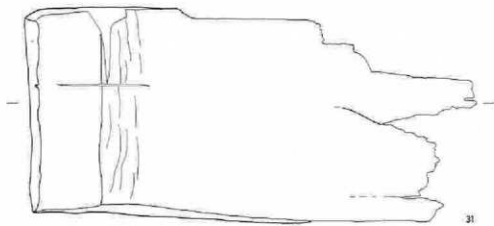


(2) 容器(樽)

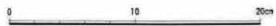
29



30



31





|



(1) 容 器（槽あるいは皿か）

30

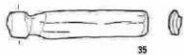
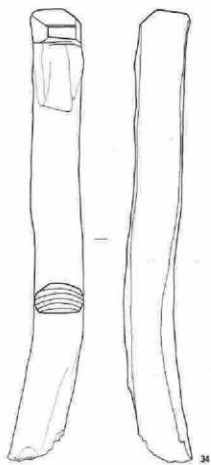
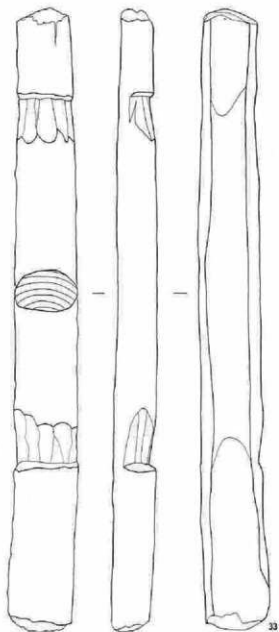
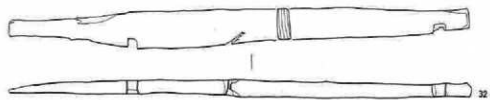


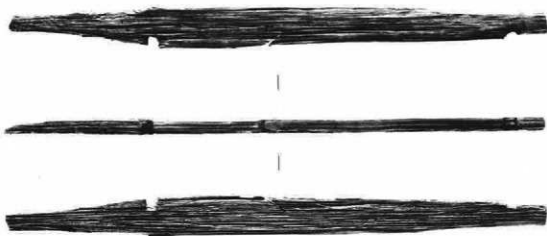
|



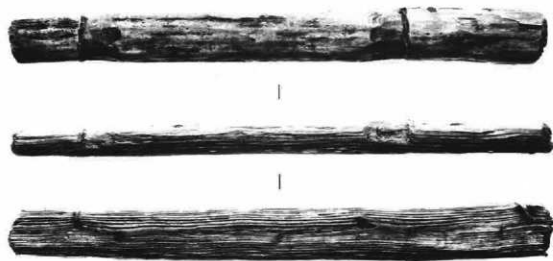
(2) 容 器（槽あるいは皿か）

31





32

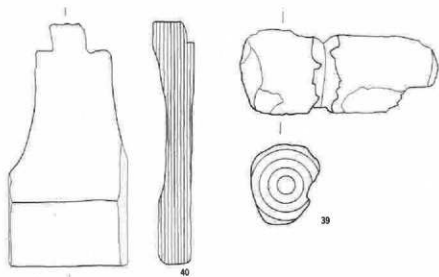
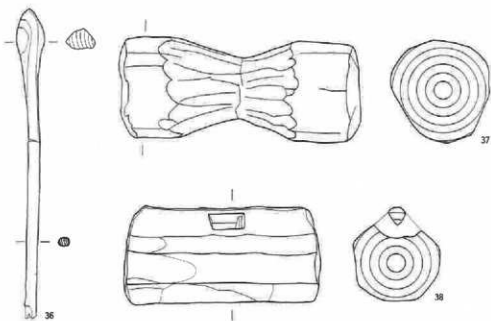


33



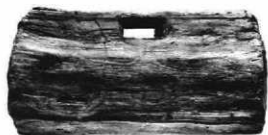
34

35





37



38



39

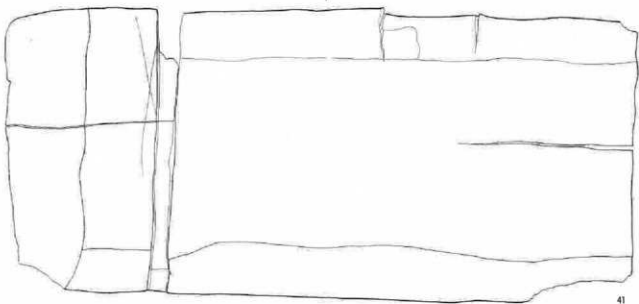
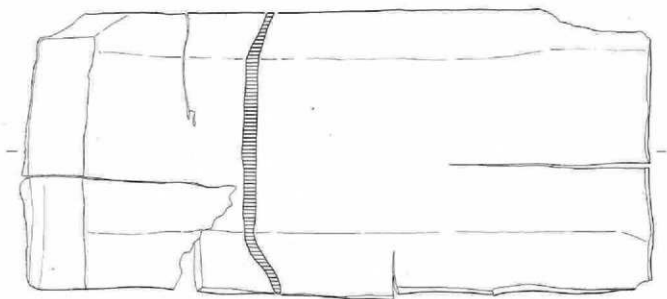


40

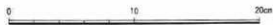


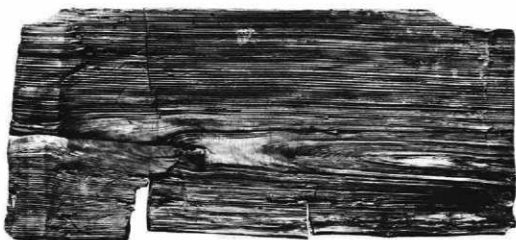
36

矢形木製品，木錘，撥形木製品

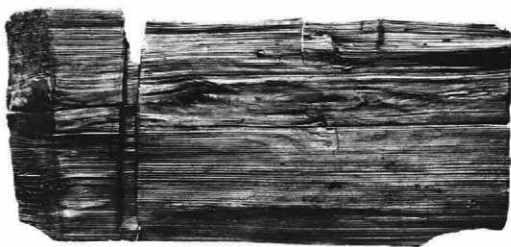


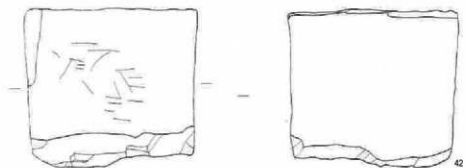
41





1







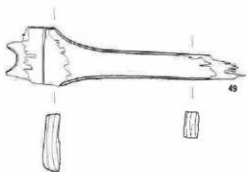
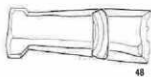
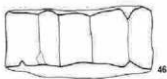
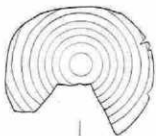
(1) 籠状木製品

42



(2) 折敷伏木製品

43





44



45



46



47



48



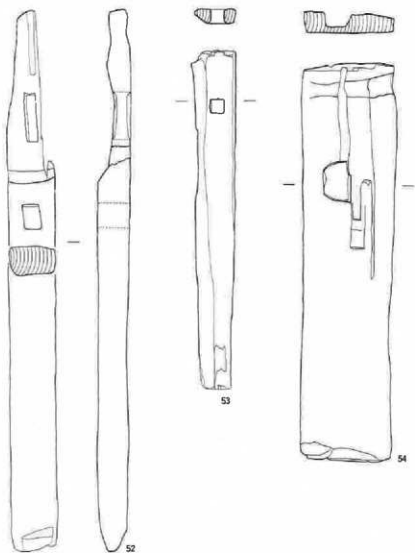
49



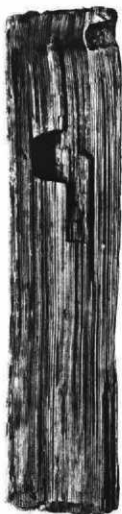
50



51



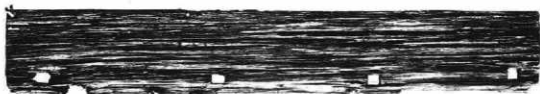
0 20 40cm



52

53

54

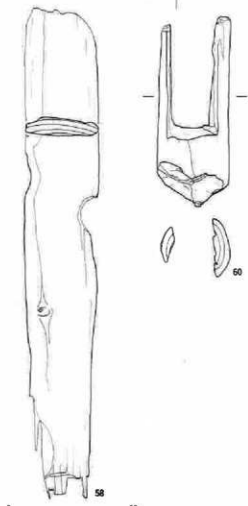
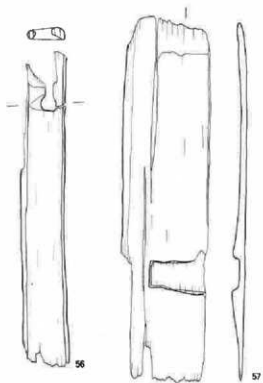


55

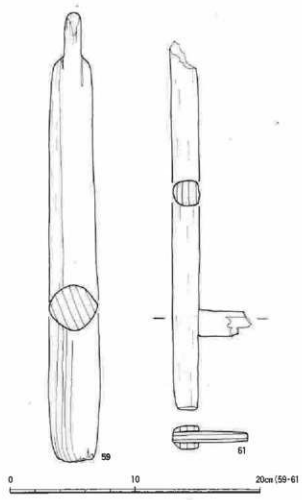


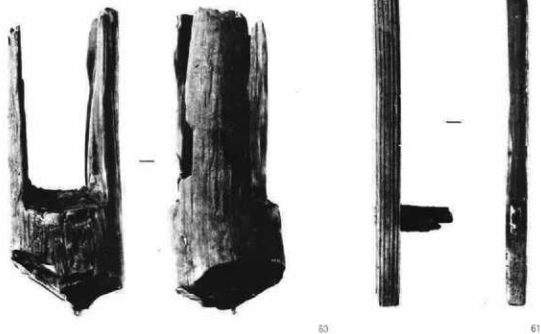
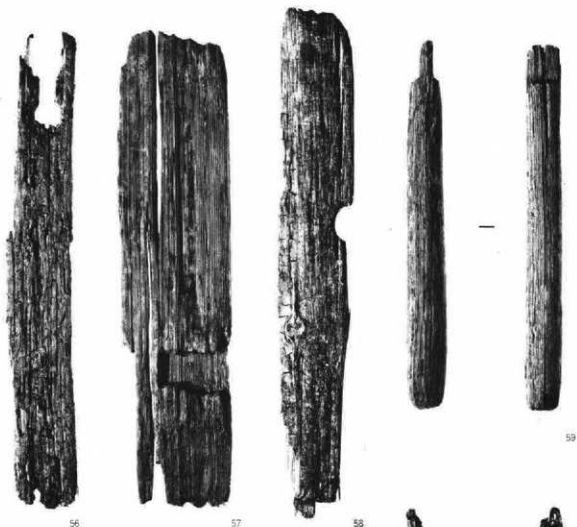
56 拡大部分

不明木製品(部材)

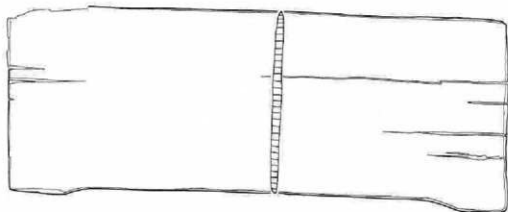


0 20 40cm (56-58-60)

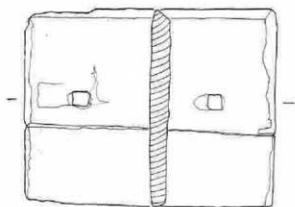




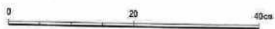
不明木製品（部材）

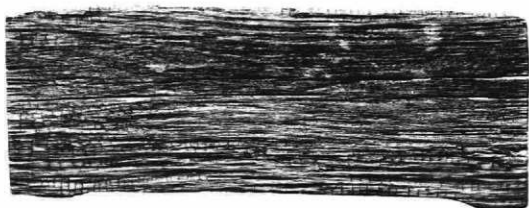


62



63





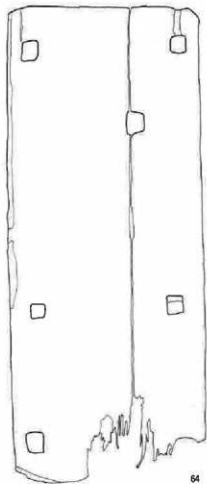
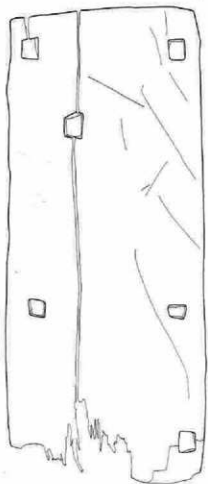
(1) 不明木製品（部材）

62

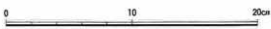
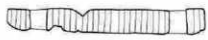


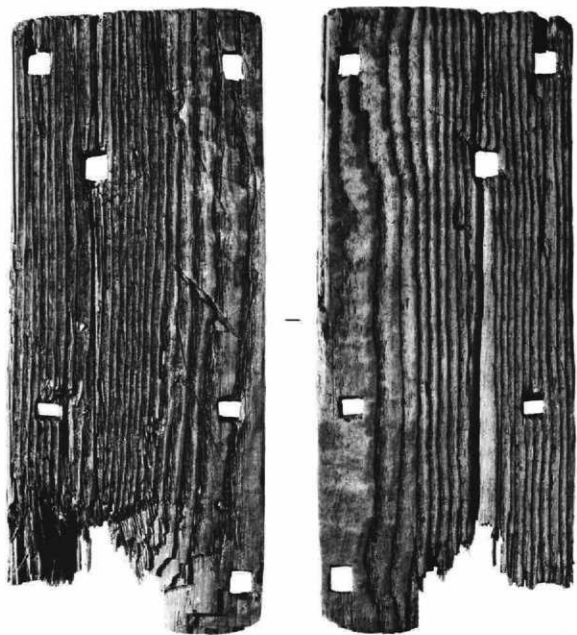
(2) 不明木製品（部材）

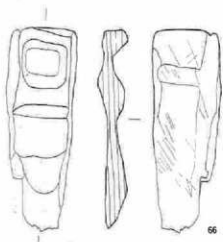
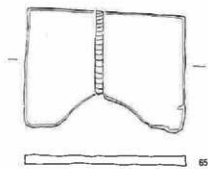
63

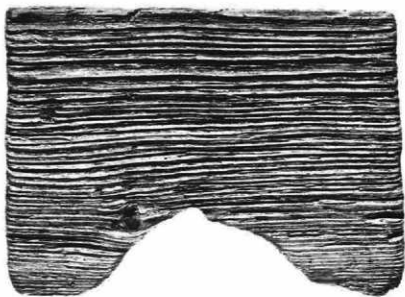


64



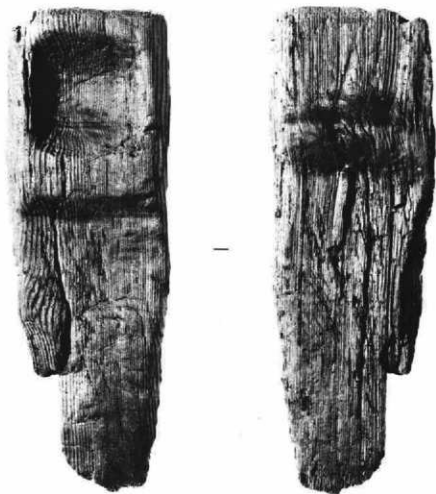






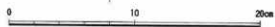
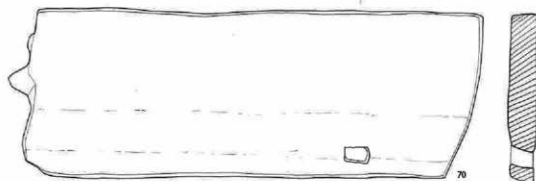
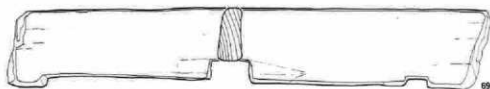
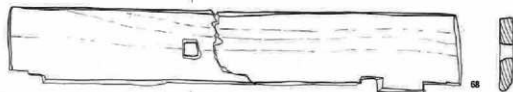
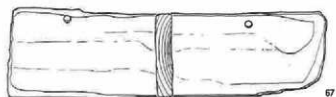
(1) 不明木製品（部材）

65



(2) 不明木製品（部材）

66





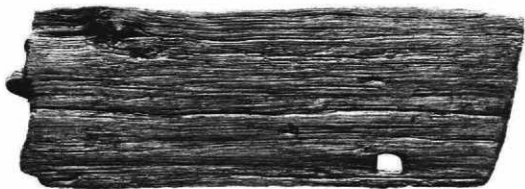
67



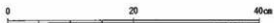
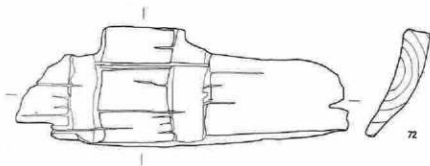
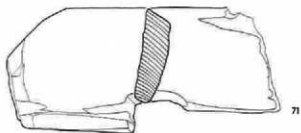
68



69



70





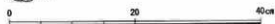
71

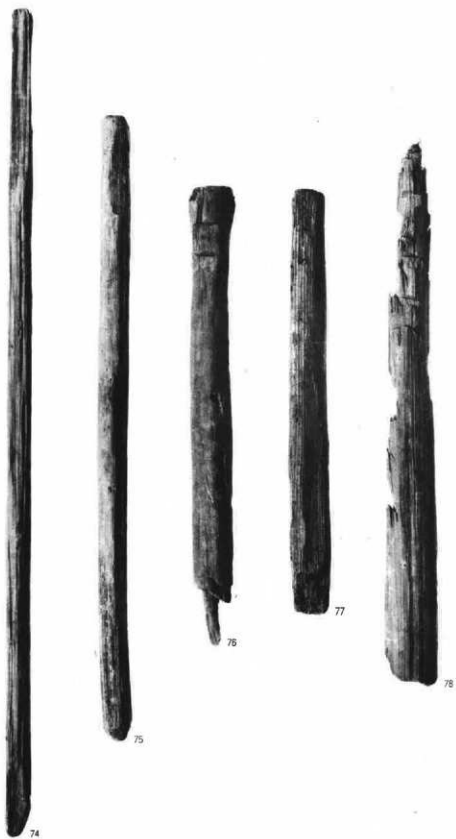


72

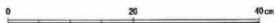


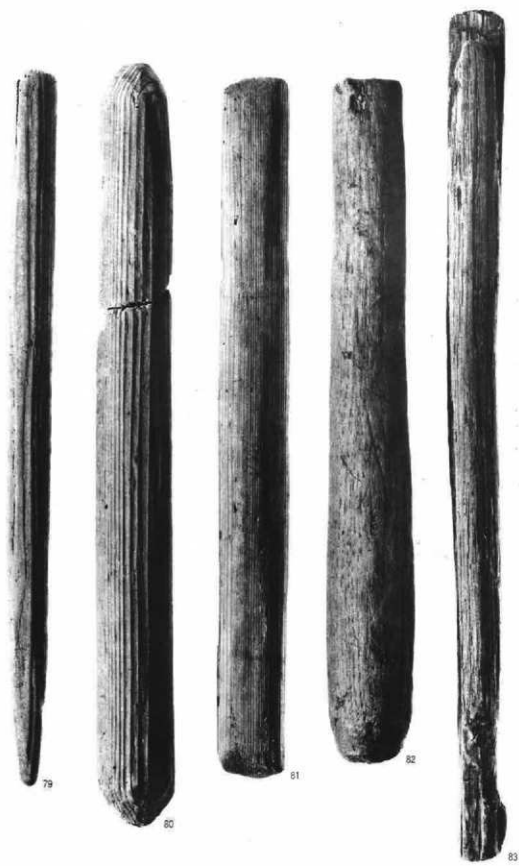
73



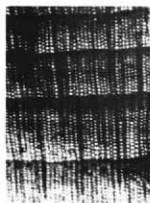


不明木製品（棒状木製品）

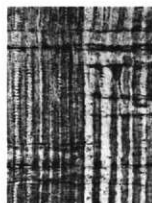




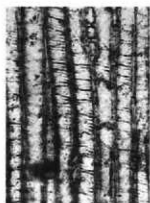
不明木製品（棒状木製品）



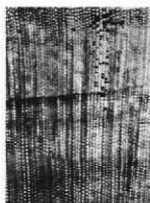
1 カヤ(17) C40×



2 カヤ(17) R200×



3 カヤ(17) T200×



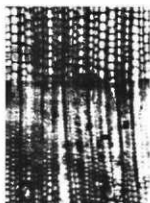
4 イヌガヤ(25) C40×



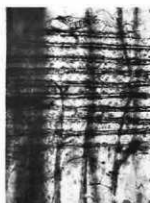
5 イヌガヤ(25) R400×



6 イヌガヤ(25) T100×



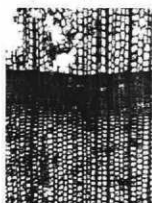
7 モミ(79) C40×



8 モミ(79) R100×



9 モミ(79) T40×



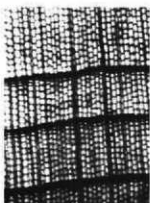
10 スギ(54) C40×



11 スギ(54) R200×



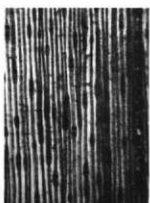
12 スギ(54) T40×



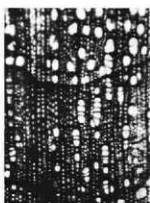
13 ヒノキ(29) C40×



14 ヒノキ(29) R200×



15 ヒノキ(29) T40×



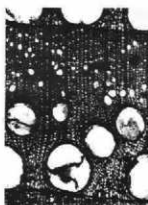
16 ハンノキ(12) C40×



17 ヒノキ(12) R 100×



18 ヒノキ(12) T 40×



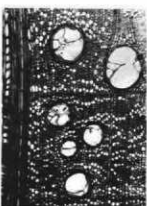
19 桐(82) C 40×



20 桐(82) R 40×



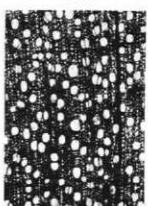
21 桐(82) T 40×



22 アカガシ(3) C 40×



23 アカガシ(3) T 40×



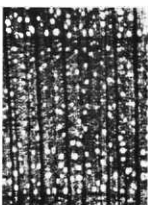
24 カツラ(34) C 40×



25 カツラ(34) R 100×



26 カツラ(34) T 40×



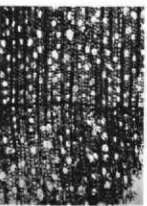
27 ツバキ(11) C 40×



28 ツバキ(11) R 40×



29 ツバキ(11) T 40×



30 サカキ(65) C 40×



31 サカキ(65) R 100×



32 サカキ(65) T 40×

米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅵ

入江内湖遺跡発掘調査報告書

—米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査—

昭和62年3月25日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発行 米原町教育委員会
滋賀県坂田郡米原町下多良3丁目3番地

印刷 有限会社 真陽社
京都市下京区油小路通綾小路下ル
TEL (075) 351-6034